



史料室だより

清泉女子大学史料室 Seisen University Archives

No.7 奥庭のシャコガイ



奥庭の楓（ふう）の木の根元には巨大な白い貝が2つおかれています。その存在を不思議に思われている方も多いのではないのでしょうか。

『清泉文苑』第3号（1986年3月清泉女子大学人文科学研究所発行）に次のような記録を見つけました。

「南庭園のふうの木の根本においてある巨大な「シャコガイ」の由来については、島津邸時代にコロール島*1にある南洋庁*2の知人からの贈り物であることが判明した」(石川邦夫*3「袖ヶ崎*4雑記」(3) 清泉女子大学—キャンパスのむかしを尋ねて」120頁)

*1 コロール島：現在のパラオにある島

*2 南洋庁：第一次世界大戦後、日本の委任統治領となった旧ドイツ領の南洋諸島に関する行政事務を管掌した分地制の地方官庁。パラオ諸島のコロールに置かれていた。(ジャパンナレッジ「日本国語大辞典」)

*3 石川邦夫：清泉女子大学元事務局長

*4 袖ヶ崎：清泉女子大学の敷地を含めた周辺の土地の大正時代ごろの地名

※*印の注釈はこの『史料室だより』編集にあたり付加

シャコガイは仏教経典ではサンゴなどとともに七宝（しちほう）の一つに数えられ、キリスト教では教会の聖盤に利用されるなど珍重されたことから、島津家に贈られたとみられます。

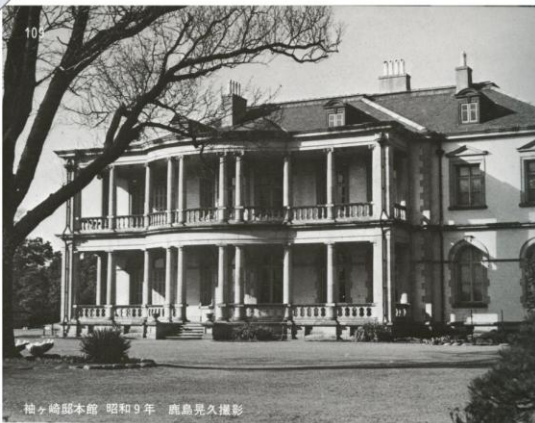
この「シャコガイ」についてのエピソードをご紹介します。

その由来を知らなかった本学職員がこのシャコガイを楓の木の根元から奥庭のさらに奥へ移動し放置していたところ、島津家第 31 代当主の島津忠秀氏が本学来校の折に、「あのシャコガイはまだありますか」と尋ねられ、慌てて楓の木の根元に戻したそうです。忠秀氏は幼少期から青春時代を本学本館の旧島津家本邸で過ごされています。第 30 代当主島津忠重氏の著書『しらゆき』に掲載されている昭和 9 年撮影の写真にその存在を確認することができます。

この「シャコガイ」の史料価値を知った史料室では、シャコガイの良好な状態での保存と、盗難のリスクも考え、2 つのうち 1 つを史料室に展示しようとしていました。しかし、このシャコガイは見た目以上に重く、男性 3 人がかりでやっと動かせるほどの重量で、国の重要文化財指定を受けている 3 号館にある史料室の床への負荷とその重量を考えると盗難のリスクも低いことから史料室に運び入れることは断念することになりました。

2 つのシャコガイは現在も楓の木の根元におかれています。

1934(昭和9)年



島津出版会『しらゆき』（島津出版会、1978年）より

2024(令和6)年



「史料室だより」は清泉女子大学公式インスタグラムにて連載中です。